月刊
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあん
7
〈EKUTEBIAN VOL.15 JULY 1997 EKUTEBIAN〉
まいあーと■日本画「そして、また建つ」by

ユリ科

ヤマユリ

撮影:宮城六郎(右)　石田淳子(左)

ヘクソカズラ

撮影:宮城直子(右)　天野延代(左)

日本はユリの宝庫。世界に約八十種ある原種のうち、六分の一は日本に分布する。

このうち**ヤマユリ**は、明治6年にオーストラリア万国博に展示され、大正元年には輸出された株が2千万株にもなり、大いに外貨を稼いだとのことである。**ヤマユリ**は、神奈川県の郷土の花になっているように、東日本の特産のユリで大柄の花は強い香りがある。

香りと言えば悪名で知れわたっている**ヘクソカズラ**がある。1cmほどの釣鐘状の花を見ている限りいじらしい感じがする。**ヤイトバナ**、**サオトメバナ**などの名はなかなか定着しそうもない。

ヤマユリ

ヘクソカズラ

えくてびあんレポート

河野晴也さんがとらえた『マクロの世界』

思い浮かべるのは大宇宙の神秘。新しい星の誕生の瞬間、あるいは遥か彼方にひろがる星雲の景色だろうか。
しかし、撮影者・河野晴也さん（栄町3丁目）が手にしていたのは、
顕微鏡のレンズ等を利用した特製のカメラ。
ガラス、木の葉、石ころなど身の回りにある物の一部を、限りなく接近・拡大して撮影したものである。
傍らにある何でもない物を「微に入って」見つめた時、
そこにもうひとつの「宇宙」が広がっていた。

■ガラスの破片の一部。まるで北欧の白夜を彩るオーロラのよう。

■無機質なガラスのコップにもこんな色のマジックが潜んでいる。

■朝焼けに現れたUFOの大群か？　門灯のカサの一部を拡大。

■まるで『スター・ウォーズ』の1シーン。これも門灯のカサ。

■水晶のような硬質な美しさ。粘り気のある「画材」とは思えない。

■一転して強烈な真紅の光。これもガラスの破片の一部から。

■何かの意思を感じさせるような不思議な紋様。ガラスの食器。

■これもまたオーロラをイメージさせるが、こちらは陶器のお皿。

■流氷を真下から見上げるとこんな感じなのだろうか。「画材」の一部。

河野晴也
1931年生まれ。
'60年、東大大学院化学系研究科（生物科学）修了。理学博士。厚生省技官として主にウイルス学の研究に努める。
'91年に退官後は、慣れ親しんだ顕微鏡や写真機を趣味として用い、独自の写真世界を表現。
5月にはアートサロン四季（曙町）にて初の個展を開催した。
栄町3丁目在住。

母なる流れに添って
30周年を迎えた『クリーン多摩川』

昭和42年のことである。ボーイスカウト立川第四団の少年たちは、多摩川のほとりに立っていた。そして、その汚れのひどさを目の当たりにして驚きの声をあげた。彼らをこの場に連れてきたのは三田鶴吉さん。三田さんがゴミを拾い始めると、少年たちも皆その後に続いた。少しづつ、少しづつきれいになっていく河川敷。そう、すべてはここから始まった。

平成9年6月8日、午前7時。爽やかな天気のもとで30年目の「クリーン多摩川」が行われた。参加者の数、およそ7、000名。わずか十数名で始められたこの清掃活動も、規模の面から見れば今や「一大行事」の様相を呈している。しかしそれは本質ではない。「会則もなく会員登録もない」この活動が30年も続けられているということは、あの三田さんと少年たちのスピリッツ、母なる大多摩川への想いが確実に受け継がれているということ。

わが立川が誇るこの偉大なる「慣わし」を継承するのはアナタ以外にはいない。「参加者一人ひとりが主催者」という三田さんの言葉は、紛れもない真実だ。

高橋久雄さん(48)
実行委員会事務局スタッフ
至誠学園・施設長

30年前、三田鶴吉さんとともに多摩川の掃除を始めた少年たち、ボーイスカウト立川第四団。高橋さんはその中にいた。現在も第四団の副団委員長として、地域のこどもたちの指導にあたっている。

「ボーイスカウトの集会に、よく多摩川の河原を使っていたんです。ここ（至誠学園・錦町）のすぐ後ろの方なんですけど。ところがゴミがひどくて、集会のできるスペースがなくなってきた。そこで、いつも我々を指導してくれていた三田さんと『掃除をしよう』って。今になってその意味の大きさはよくわかりますが、当時の僕らは、ただ集会がやりたかっただけ（笑）。庭先の掃除をするような、ほんとに軽い気持ちでした」

「よき公民となるというのがボーイスカウトの理念なんですが、でも、そんなかしこまった感じでもなかった。汚れているから片付ける、といった当たり前の感覚だったように思います」

凡百の市民運動とクリーン多摩川の決定的な差異は、この何気なさである。

「クリーン多摩川は『イベント』じゃないから（笑）」

久住達夫さん(56)
実行委員会事務局スタッフ
クスミ不動産・専務

スローガンや形式とは無縁のクリーン多摩川だが、昭和47年、参加者の増加に対応するために、立川印刷所会長・鈴木闘郎さんを中心に実行委員会事務局が組織された。久住さんは事務局の会計担当として、クリーン多摩川を影で支え続けているお一人だ。これまでの経過を記した資料を拝見しながらお話を伺った。

「去年も東京都知事から、自然環境保護に対する功績で唯一の団体表彰を受けたり、市民運動として一般に認められてきたんですよ」

でもね、と言いながら久住さんが指し示した箇所。そこに書かれていたのは『参加者一人ひとりが主催者である』という文字。

「難しいことだけど、これが大事なんだね。続かなくなっちゃうから。でも最近、僕らの孫ぐらいの年の子も出てきててね。すごいよね、親子三代だもの（笑）」

ボーイスカウト立川第七団の団委員長も務める久住さん。若い世代への橋渡し役も、積極的に担っている。

山田健二さん(64)
参加歴15年
富士見町5丁目

「そうですか、もう30年も続いてるんですか」

知りませんでした、と笑う山田さんは、知人に誘われて15年前から参加している。その間、年2回のクリーン多摩川はすべて皆勤。

「今じゃ想像もつかないゴミもありましたね。上流から流れてきた大きな流木をみんなで拾い上げたりして。最近はコンビニの空袋とか、食品のスチールのパックとか。クリーン多摩川に出ると時代の移り変りがよく分かります（笑）」

山田さんは、クリーン多摩川に参加するといつも感じることがあるという。

「野球のグランドには入らないとか、釣りを楽しんでいる人の邪魔にならないとか、誰に教えられたわけでもないのに、皆マナーみたいなものを守っている。普通こういう事をしていると、ちょっとエラぶりたくなるのにね（笑）」

この雰囲気がクリーン多摩川の魅力だと語る山田さん。

「若い人は掃除に行くとかじゃなくて、川に会いに行こうという気持ちでいいんじゃないかな。多摩川を直に見るなんて、自然を感じる絶好の機会じゃないですか」

武本孝史さん(51)
参加歴10年
柴崎町5丁目

柴崎町5丁目、多摩川とは目と鼻の先の場所で測量事務所を営む武本さん。

「参加歴10年なんて、ほんの新人ですね（笑）」

確かに30年という年月に比べれば10年は三分の一に過ぎない。が、年に2回とはいえ、10年間ずっと参加し続けているというのも、なかなか出来ることではない。

武本さんは、10年前に比べたらゴミはずっと少なくなったと感じている。それは今回お話を伺った他の方々も同じ意見だ。

「台風が来なくなったとか、整備が整ったとかいろんな理由があるでしょうけれど、ゴミを捨てる人自体が少なくなったように思います。クリーン多摩川に参加すると、ゴミが落ちてたら拾うという気持ちから、ゴミは捨てないという気持ちに変わってくるから不思議ですよね（笑）」

何気なく参加したクリーン多摩川から、こんな心境の変化に気づく人は多いのではないでしょうか、と武本さんは語る。

「だから続けていきたいんです。ずっと出ていきたいなと」

『クリーン多摩川』30周年 記念碑除幕式＆記念式典

■「参加者一人ひとりが主催者です」。挨拶に立つ三田鶴吉・クリーン多摩川実行委員長。

■記念式典の司会を務められたのは、実行委員会事務局長・鈴木闘郎さん（立川印刷所会長）。

■関頑亭さんの手によるナマズの絵が描かれた記念碑を囲んで記念写真。

えくてびあんエッセイ●No.51

私とシャンソン

料理研究家　浮津宏子

シャンソンは、生活の中から生まれた人生の喜び、苦しみ、悲しみ、暖かさを伝える唄。人の生きてゆく長い道程の中で、ありのままの姿を表現してくれるものではないでしょうか。

昨年一月から三月にかけて、高松公民館の主催による「やさしいシャンソン」の講座を受講して、少女時代からの懐かしい想い出がよみがえってきたのです。

宝塚歌劇で聞き、口づさんできた「すみれの花咲く頃」「モン・パリ」「幸せを売る男」「オー・シャンゼリゼ」等々。宝塚の白井鉄造氏がフランス留学中に「パリゼット」というレビューをご覧になって、それを持ち帰って上演したのが一九三〇年八月ということですから、私の生まれる少し前から、フランスのエスプリが日本に上陸していたということで益々感激です。

最も、その宝塚で私がシャンソンと出会ったのは戦後のことでしたが、越路吹雪さんや久慈あさみさんなどの全盛時代。その後、深緑夏代さんや越路さんはシャンソン歌手としても大活躍。シャンソンの中にはレジスタンスや反戦を唄ったものや、甘い恋の唄など、大衆の心を語り続けていてくれるような気がします。

その後エディット・ピアフや、日本にも来日されたジョルジュ・ムスタキ、サルバトーレ・アダモなどを知るにつれ、益々のめりこんでゆきました。

特に貧しく生まれ育ったピアフが生活感を滲ませながら唄った数々のヒット曲。「愛の讃歌」「バラ色の人生」…。彼女は恋多き女性のように思われがちですが、その刻・その刻を真剣に生きて、その体験を通して、素晴らしい詞が生まれています。後進の為にも道を開き、イブ・モンタンなども最初に彼を見出し、世に出したのは彼女。でも恋心を抱いてバラ色の人生を夢見たり、ある刻は恋人の突然の事故死に会い、その悲しみ、苦しみ、辛さの中から人々を感動させる「愛の賛歌」のような情感に満ちた名曲も生み出しています。

シャンソンは私にとって、漲るような生命のパワーを感じさせてくれます。私も毎日毎日、食物を有難くいただくことによって生かされ、見たり、聞いたり、学んだりということで、更に人生を充実させたいと願っている日常です。

前述の講座でお会い出来たのが、深緑夏代さんに師事されたという、シャンソン歌手の高関絢子さんでした。その唄声に魅せられた有志が早速にお願いして、「立川シャンソン友の会」として四月より指導をしていただくようになったのです。高関先生はこの立川の地で、シャンソンが誰でも気軽に唄えて楽しめる様にと、月に二回のお稽古日を実に熱心にご指導して下さっています。

ジョルジュ・ムスタキは、エジプト生まれのギリシア人ですが、国籍をこえてエディット・ピアフのために「ミロール」の作詞をしました。長い間彼は不遇でしたが「異国の丘」「時は過ぎてゆく」など、一九六九年頃から、シャンソンの歌手としても、自作の曲で登場してきました。青春時代に不遇だったせいか暗い曲が多いようですが、着実に自分の人生をみつめてあゆんでいる姿が投影とされます。それは大きな自然の中に身をまかせて、そこに自分の夢や希望を見出してゆく。飾らない心、ウソのない真実をみつめる生き方。そんなところも私にとってはたまらない魅力です。

音楽には色々なジャンルがあり、それぞれに深い感動を与えてくれるものがありますが、シャンソンは語っても良いし、唄っても良いし、軽く鼻歌でと、その日の気分で生活に密着した詞を理解して楽しむことができると思います。声のために何が良いかと考えるのもうれしいこと。目下の私にとっての暮らしのすべてとも言えます。

真味百撰④ カフェ べる・こむーね

駅南口を降りてすぐ
わが町に "ありそうでなかった"
カフェの本道をゆく店

柴崎町2-2-7 加賀屋南口ビル2F ☎29-7800
10：00〜22：00（ランチ11：00〜14：00）/水曜定休

べる・こむーねとはイタリア語で "美しいコミュニティ" という意味。還暦を過ぎた仲間3人が「お年寄りも若者も一緒に楽しめるサロンづくり」を目指し、この4月に開店した。

ギターのBGMが流れる店内。長居を詫びる客に「どうぞどうぞ、ウチはそういう所ですから」と応える声は支配人を務める富永恒雄さん（写真）。前職は英語教師だったが、30年来のコーヒー好きが高じて本職となってしまった。ご本人曰く「まだまだ怖くて他の豆をいじれない」とメニューはブレンドがメイン。だがコーヒー好きがいれるコーヒーがまずいはずはない。オールドビーンズと深煎にこだわる富永さんの "たかがブレンド、されど" のココロザシが伝わる一杯は、400円で味わえる。軽食はグリエールチーズをたっぷりと使ったキッシュ、トマトの風味が優しい田舎風ポタージュ（ともに700円）がお薦め。こちらはもう1人のお仲間、花田聖子さんの手によるもの。適度なボリューム感や軽く戴ける気楽さなど軽食の本分を全うしながらも、ドイツ・アルプスでの生活経験があり、西欧の家庭料理に詳しい花田さんの工夫が生かされた味は決して「脇役」とあなどれない（写真はポタージュのランチセット・850円）。

毎月第1・第3土曜日の夕方からは、店内でミニコンサートも実施。「気取らず、のんびりお過ごしください」という富永さんの言葉は、カフェの本道を語っている。

多摩川をきれいにしようという動き、その発端は三田鶴吉さんと三十年前のボーイスカウトの皆さんであったという。少年の胸は多摩川に浄められたことであろう。並にある「イベント」とは、どこか違う。集まってくる人々は、ボランティア顔をしていない。単なる「お掃除」とも違っているのもこの活動を魅力あるものにしている◆多摩川に会いにくるつもりで参加すればよい、と云った方がおられたが云い得て妙である。実際、私たちは立川の空気を吸っていながら、南を流れる多摩川を見る機会は滅多にないのではないだろうか。たとえば、この一年、幾度川を見に行ったであろうか、あるいは幾度触れたであろうか。私たちは、つい、コンクリートの上で「地球にやさしく」とか自然環境の破壊をむなしく叫んでいる◆同じ六月八日、中央公民館では山草展が開かれていた。「第三二回初夏の山草展」とあった。イワマツ、ギボウシ、ツキミソウ、ヤマアジサイ、バイカウツギ等、約三百点が展示されていて、熱心な鑑賞者でにぎわっていた。そこここに俳人の顔がみえる。ちょうどこの日、立川市民俳句会の例会があった、そのためであろう。野草展ほたるぶくろのぬきん出て　冬華◆クリーン多摩川、三〇年。山草展、三二回。俳句会、四〇年。それぞれの立場で「大自然」を相手にして、歳月を刻んできている。しかも肩ひじ張らずに◆あじゐいの　藍をつくして　えくてびあん

〔表紙〕日本画「そして、また建つ」櫻村 修（砂川町6丁目）
〔編集〕池田龍男　小林康史　隅川 瑾　名尾居眞　山田恵子　松本わかこ　大須賀久典
〔写真〕天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　五来孝平

月刊 えくてびあん 第156号
平成九年七月一日発行
発行所 えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル6F 〒190
電話 〇四二五(28)0082
FAX 〇四二五(28)0065
編集発行人 立井啓介
印刷所 ㈱大廣社

連載 四字熟語（二）

臥薪嘗胆

がしんしょうたん。

将来の成功を心に期して長い間、苦労すること。

『十八史略』の中の故事から出た言葉。春秋時代に呉の国と、越の国とが戦った時、破れた呉王は戦死した父の仇を討つために、毎夜薪の上に寝て戦意をかきたてました。一方、越王は獄から取った苦い胆を身近にぶらさげて、これを嘗めて自らを奮いたたせたといわれています。

えくてびあんの輪

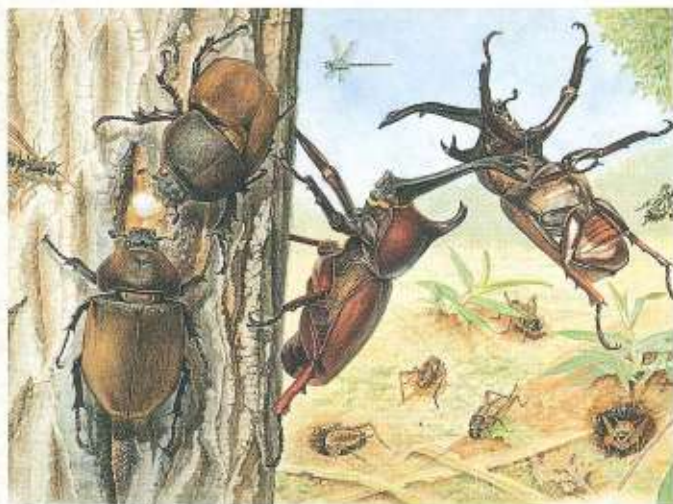
人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも えくてびあん！

立川昆虫記

最終回

【カブトムシ】

コウチュウ目コガネムシ科
右オス・左メス

絵・文　中西　章（若葉町）

カブトムシの成虫は、クヌギの木の幹からしみ出る樹液が醗酵してアルコールになったものをなめて、エネルギー源とします。そこはオスとメスが出合う所でもあり、しばしばオス同士角を使って争い、メスを取り合います。勝ったオスと交尾したメスは、堆肥などの中にもぐり込んで産卵します。幼虫は強いアゴを持ち土の中の腐った植物を食べて育ち冬を越して、翌年の夏成虫になって、再びクヌギ林に現れます。樹液には他の昆虫（甲虫、ハチ、チョウ）が集まりますが、力の強いカブトムシが居ると、皆んな遠慮して、近寄りません。かつてカブトムシと遊んだあの雑木林をもう一度呼びもどしたいものです。